

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520428

研究課題名(和文) 項の具現化と構文形式に関する総合的研究

研究課題名(英文) Integrated Study on Argument Realization and Constructional Forms

## 研究代表者

岸本 秀樹 (Kishimoto, Hideki)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10234220

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、項の交替現象や構文形式の変異の可能性に特に着目し、記述的な側面を重視しながら、その本質が何にあるかを総合的・体系的に解明することを目標として行われた。主に日本語に注目しながら、交替を起こす項や述語にはどのような意味的な特徴があり、それが統語構造にどのように反映されるのかを明らかにした。さらに、非規範的な形式を持つ構文の変異形式の多様性にして、理論的考察を行った。このような項交替や構文形式の変異に関して、新たな言語事実の掘り起こしを行うことができ、この分野での研究に貢献できるものになったと考えている。

研究成果の概要(英文)：This research project has examined some of the linguistic phenomena related to argument alternations and variations on construction types, and aimed to reveal the system of how these phenomena are realized, while placing a particular emphasis on descriptions of empirical facts. While paying special attention to Japanese, this study has investigated a number of semantic features of arguments and predicates, which instantiate argument alternations and construction variations, and attempted to provide a theoretical account for how they are reflected in syntactic structures. The empirical data found in this research project will contribute to the development of ongoing research falling under the realm of argument alternations and construction variations.

研究分野：言語学

キーワード：項の具現化 構文形式

## 1. 研究開始当初の背景

言語がとることのできる構文形式については、以前に考えられていた以上に重層的であることが分かってきており、様々な文法理論において理論化が試みられている。特に、主語のマーキングが主格以外の形で標示される構文についての研究は、類型論的な方法論を用いたものが主流を占めている。生成文法などの文法理論では、非規範的な形式をもつ構文がそれほど存在しない英語を中心に理論化が進められてきたために、非規範的な形式をもつ構文に対して個別にはいくつかの提案はされているものの、体系的な説明をできるようにはなっていない状況がある。また、近年、理論の抽象化が進んでいるために、具体的な言語現象を説明する道具としては使いにくくなっているという状況もある。しかし、理論の予測に基づいて言語現象を詳細に検討し言語に関する知見をもたらず研究に対する要請は強い。そのため、そのような要請を満たすことができるような研究を進める必要があった。

申請者がおこなってきた、本課題に取り組む以前の研究課題としては、非対格性の問題、名詞化の問題、文構造の階層性などがある。これらの研究では、それぞれの構文に見られる特性に焦点を当てて、日本語を英語やイタリア語などと比較する対照言語学的な研究を行ってきた。これらの研究の結果として動詞よりも名詞や形容詞が述語になった場合に、動詞よりも多様な構文の変異や項の交替現象が起こることがわかってきた。このような研究の経緯から、どのような述語のタイプが現れる時にどのような構文が可能であるのか、あるいは、非規範的な形式をもつ構文の構造がどのようになっているのかという問題を体系的に解決することが必要になってきた。そのため、本研究課題が立案されることになった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、項の交替現象や構文形式の変異の可能性に特に着目し、記述的な側面を重視しながら、その本質が何にあるかを総合的・体系的に解明することにある。英語など、比較的研究が進んでいる西欧の言語において存在しない構文は、日本語を含めアジアの言語で多く観察されている。本研究が扱おうとする現象は一部で研究され始めている。その一方で、扱う言語現象をきわめて限定しながらも、深く追求してゆくことによる言語理論への理論的貢献を行おうとする研究も、英語や日本語を中心に見られるが、本研究が扱う現象をとりあげたものはあまりない状況にあった。また、国際的な貢献につながる成果を上げるには、国内での理論的研究と記述研究で得られている情報や研究成果が共有されなければならないが、実際の

ところは、その接点が少なく、現状では、日本から発信できる研究はそれほど多くない。

本研究は、先にもあげたように、項の交替現象や構文形式の変異の可能性とその本質を総合的・体系的に解明することが目標であった。そのような研究の構想のもとで、日英語の比較を出発点として、他の言語との対照もとり入れた上で、交替現象や非規範的構文から得られるデータを詳細に検討し、統語および語彙の特性を中心に自然言語における文法の可能性について本課題では追求した。理論だけでなく教育などの応用の可能性も視野に入れたバランスのとれた理論を構築することを目標に研究を進めた。本課題では、特に、言語の普遍性と個別性の観点から、構文の形式がどのような要因によって決まるかについての知見を得ることを重視して、自然言語に見られる構文タイプの変異の制約がどのようなものであるかを解明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

項の交替現象や構文形式の変異の可能性について、その本質を総合的・体系的に解明した上で、可能な言語構造に関する知見を積み上げて言語の形と意味を観察することによって、バランスのとれた理論を構築することを本課題では目標としている。その課題を達成するために、大きく2つの研究の目標(目的)を設定し、その個別目標について研究をおこなっていった。

本研究の1つ目の目標は、項の具現化をつかさどる要因の解明であった。述語のとり項の具現化に関しては、いくつかの可能性のあることが多く、述語の項が、基本的な文法的役割が同じであっても異なる標示が与えられるという現象は様々な言語においても観察されている。これは一般に、項交替の現象と言われるが、これにはさまざまなパターンが観察される。日本語においても、英語などで観察されているのと同じような交替(例えば、「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」)もあれば、これまであまり議論されていなかったタイプのもの(例えば、「この子は、メアリーの唯一の自慢だ」と「メアリーには、この子が唯一の自慢だ」に見られる「の」格と「に」格の間の項交替)もある。そのため、1つ目の課題では、主に日本語に注目しながら、交替を起こす項や述語にはどのような意味的な特徴があり、それが構造にどのように反映されるのかを明らかにすることを念頭において、経験的なデータを収集した上で、理論化を試みるという手法で、研究を進めていった。特に、後者のタイプの交替は、統語的に興味深い分布が観察されるので、どのような要因に起因するかを解明することに重点を置いた。

2つ目の目標は、構文タイプの変異を解明することであった。非規範的な形式を持つ構

文は、通常見られる規範的な構文と比べて、変異の可能性が高く、構文のタイプは述語やその他の要因により変異型が存在したりしなかったりと、構文の形式の可能性が変わる。例えば、所有を表す場合、英語では典型的に have を用いて、主格主語構文を使用するが、日本語では最も典型的に「ある/いる」のような動詞を使い、与格主語構文を使用する。また、言語によっては、動詞を使わずコピュラ構文を用いる場合もある（例えば、ロシア語など）。また、同じ所有を表す場合でも、日本語では、「持っている」を用いると、通常の主格主語構文が使われることになり、同じ言語でも異なる構文が使用されることになる。基本的に同じ意味を表すのに、いくつかの異なる構文が使用されるということは、何らかの動機付けがあるはずである。構文タイプの選択がどのようなメカニズムによって（特にどのような意味要因で）起こるかについて説明するために、いろいろな言語から資料を収集しつつ、日本語を中心に、データを解析し、理論化を進めるという手順で研究を進めていった。2 つ目の目標を達成するためには、特に、言語間の構文の違いが何に起因するかを説明することが重要であったので、言語を対照するという対照言語学的手法を用いて、いくつかの言語を比較することに研究の重点をおいた。

#### 4. 研究成果

項の交替現象や構文形式の変異に関係する現象で、これまであまり議論されることがなかったもののいくつかに関してその特性を本研究において明らかにできた。そして、その研究結果を著した論文をいくつか出版することができた。

その主なものとしては、イディオムの研究があり、イディオム内に含まれる述語の表す意味と形式に関して、「名詞句+動詞」の連鎖を持つイディオムとそれと同じ動詞が現れる通常の文との比較を行った結果、イディオムの構文は、通常の名詞句とは異なる配置をするものが多くあることが分かり、それに対する理論的な考察を行った。

次に、日本語・英語および Hindi、Marathi、Bengali 語の特殊構文（属格主語構文および与格主語構文）の比較対照を行い、その検討の中で、英語に対してはあまり見られないようなタイプの主語が Hindi、Marathi、Bengali に現れることがわかり、それに対応するものが日本語にも存在することを発見した。日本語に関する新たなデータの発見があり、比較統語論の視点から、他の言語も含め日本語の事実を説明する理論の開発を行った。これらの諸現象の検討を通じて、主語の階層性および、述語の表す意味と形式に関して、理論開発を行い、述語の意味と主語に与えられるマーキングとの間に相関関係があることを経験的な事実に基づいて明らかにすること

ができた。

本研究課題は、言語の構造に関する理論的研究であり、言語資料に理論的検討を加え、理論的な提案を行い、その帰結について考察を加え、学会等で報告し、さらに、論文を執筆した。本課題の研究成果は、国内外の学会等で発表・報告した。研究成果の発表・報告については、国外および国内で開催された学会において、計 17 件の実績がある。著作された研究成果に関しては、日本語の統語構造・情報構造を中心に論じたものを国内外の学術雑誌に投稿し、15 件が出版された（審査中のものは除く）。また、成果の一部を著した著書も 1 件ある。特に、これらの出版物は、対照言語学的な比較により、新たに得られた日本語の事実・知見を公表したのがあり、データの貢献が期待されるものである。これらの論文には、新たな経験的データの報告がなされており、将来的にも国内外の研究の進展に寄与することができるものであると考える。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 15 件)

1. 岸本秀樹「日本語の属格主語と A-移動」『神戸言語学論叢』第 10 号, pp. 24-37, 2016.
2. 岸本秀樹「「見つかる/つかまる」クラス述語の他動性」Prashant Pardeshi, Heiko Narrog, 桐生和幸(編)『有対動詞の通言語的研究』pp. 43-57, くろしお出版. 査読有, 2015.
3. 岸本秀樹「出来事の不成立を表す複合動詞について」由本陽子・小野尚之(編)『語彙意味論の新たな可能性を探って』pp. 72-101, 開拓社, 査読有, 2015.
4. Hideki Kishimoto “Exclamatives and nominalization in Japanese.” In Andrew Joseph and Esra Predorac (eds.) *Proceedings of the 9<sup>th</sup> Workshop on Altaic Formal Linguistics (W AFL 9)*, pp. 159-170. MIT Working Papers in Linguistics 76, 査読有, 2015.
5. Hideki Kishimoto “Long distance passivization in Japanese compound verbs.” *Contemporary Issues on Linguistics and Language: LILA '14 Linguistics and Language*, pp. 141-148. DAKAM Publishing 2014.
6. Hideki Kishimoto “Dative/genitive subjects in Japanese: A comparative perspective.” Mamoru Saito (ed.) *Japanese Syntax in Comparative Perspective*. Chapter 9, pp. 228-274. Oxford University Press. 査読有, 2014.
7. Hideki Kishimoto and Geert Booij “Complex

negative adjectives in Japanese: The relation between syntactic and morphological constructions.” *Word Structure* 7, pp. 55-87. 査読有, 2014.

8. 岸本秀樹「「名詞+ない」型形容詞と名詞編入」岸本秀樹・由本陽子(編)『複雑述語研究の現在』ひつじ研究叢書第109巻 pp. 41-65. ひつじ書房. 査読有, 2014.
9. 岸本秀樹「統語的複合動詞の格と統語特性」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端-謎の解明に向けて』pp. 143-183. ひつじ書房, 査読有, 2013.
10. 岸本秀樹「日本語の階層構造: 等位接続から見た構造」遠藤喜雄(編)『世界に向けた日本語研究』15-43. 開拓社, 2013.
11. Hideki Kishimoto “Notes on correlative coordination in Japanese.” In Yoichi Miyamoto, Daiko Takahashi, Hideki Maki, Masao Ochi, Koji Sugisaki, and Asako Uchibori (eds.) *Deep Insights, Broad Perspectives: Essays in Honor of Mamoru Saito*, pp. 192-217. Kaitakusha, 査読有, 2013.
12. Hideki Kishimoto “Verbal complex formation and negation in Japanese.” *Lingua* Volume 135, *Special Issue: Complex Predicates*, edited by Simin Karimi, pp. 132-154. 査読有, 2013.
13. Hideki Kishimoto “Covert possessor raising in Japanese.” *Natural Language & Linguistic Theory* 31. pp. 161-205. 査読有, 2013.
14. 岸本秀樹「授受動詞の意味と格」畠山雄二(編)『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』pp. 99-111, 開拓社, 査読有, 2012.
15. 岸本秀樹「壁塗り交替」澤田治美(編)『ひつじ意味論講座: 第2巻 構文と意味』第9章 pp. 177-200. ひつじ書房, 査読有, 2012.

[学会発表](計 17 件)

1. Hideki Kishimoto “Sinhala focus constructions from a discourse-syntactic perspective.” 国際ワークショップ「比較的観点から見た係り結び」(The International Workshop “Kakarimusubi from a Comparative Perspective”) September 5-6, 2015, 国立国語研究所(the National Institute for Japanese Language and Linguistics.) (東京都)
2. Hideki Kishimoto “Dative case and three-place predicates in Japanese.” *International Conference on Role and Reference Grammar* 2015. July 31, 2015, Düsseldorf, (Germany).
3. 岸本秀樹「日本語動詞否定辞「ない」の文法化について」『文法化: 日本語研究と類型論的研究』(NINJAL International Symposium: Grammaticalization in Japanese

and across Languages), July 3, 2015 国立国語研究所(the National Institute for Japanese Language and Linguistics.) (東京都)

4. 岸本秀樹「関係節の主要部と名詞句の接近可能性」関西言語学会ワークショップ「文の統語・意味解析情報をタグ付けした日本語構造体コーパスの開発」2015年6月13日, 神戸大学(兵庫県)
5. 岸本秀樹「統語構造の日英比較」日本第二言語習得学会研修会, 2014年10月19日, 関西学院大学(兵庫県)
6. Hideki Kishimoto “On the raising class of Japanese compound verbs.” *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 7. June 27, 2014. 国際基督教大学(東京都)
7. Hideki Kishimoto “Long distance passivization in Japanese compound verbs.” *Language and Linguistics Conference 2014*. , June 17, 2014, Istanbul, (Turkey).
8. Hideki Kishimoto “The locus of case for verb compounds in Japanese.” *Glow in Asia X*, Hsinchu, (Taiwan), May 25, 2014.
9. 岸本秀樹「状態述語と感嘆表現」日本英語学会第31回大会ワークショップ「状態性述語の形態・統語・意味をめぐって」2013年11月9日, 福岡大学(福岡県)
10. Hideki Kishimoto “Another look at NPIs in Japanese.” *Japanese/Korean Linguistics* 23, October 13, 2013. Cambridge, Massachusetts (USA)
11. Hideki Kishimoto “Coordination and movement of honorific heads in Japanese.” *19<sup>th</sup> International Congress of Linguists (CIL19)*, Geneva (Switzerland), July 25, 2013..
12. Ryosuke Shibagaki, and Hideki Kishimoto “Parametric view for tense projection.” *Towards a Theory of Syntactic Variation*, June 7, 2013, Bilbao (Spain)
13. Hideki Kishimoto “Nominal-internal subjects in Japanese.” *GIST6 Workshops: Complementizer Agreement and Subjects*. October 17, 2012, Ghent (Belgium).
14. 岸本秀樹「数量副詞と非対格性」Morphology and Lexicon Forum 2012, 2012年9月22日, 東北大学(宮城県)
15. Hideki Kishimoto “On the position of subjects in Japanese.” *2<sup>nd</sup> York East Asian Syntax Forum Workshop*. August 23, 2012. York (United Kingdom)
16. 岸本秀樹「項交替と主格制約」国際シンポジウム『日本語の自他と項交替』2012年8月5日 国立国語研究所(東京都)
17. Hideki Kishimoto “Non-canonical marking of subjects in Japanese nominal-predicate constructions.” *Non-Canonically Case-Marked Subjects within and across Languages and Language Families: Stability, Variation and Change*. June 6, 2012, Reykjavik, (Iceland).

〔図書〕(計 1 件)

1. 岸本秀樹『文法現象から捉える日本語』単著, 開拓社言語・文化選書 53, pp. 213+x, 開拓社 2015

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

岸本 秀樹 (KISHIMOTO HIDEKI)  
神戸大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：10234220

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし